株式会社文藝春秋　メディア事業局　業務推進部

圓谷　亮太様にご講演いただきました

「文春の話。ご縁の話。」というテーマでした。

始めは文藝春秋の会社のご紹介でした。

「親しきなかにもスキャンダル」、「向かうところ敵だらけ」という週刊文春元編集長のポリシーについて、真剣に聴いています。

100 枚ものスライドをご準備いただき、多岐に渡るお話をお聴きしました。

(株)有隣堂の You tube 動画に文藝春秋の前編集長新谷学さんが出演なさったときの様子を視聴しました。

ご縁のお話の中には、本校に関わることもあり、驚きの声が多く上がっていました。

～生徒の感想～

・文藝春秋という出版社の二つの雑誌で印象が全く異なる性質であることを初めて知りました。文春という言葉の印象は、「暴露」「パパラッチ」のようなものだと思っていましたが、事実を重要視していて読者にも世間にも公平な内容を出している実態を知り、雑誌を買わない自分でも読んでみたくなりました。日本のマスメディアは政治との距離感が近いと海外に比較されてよく言われますが、文春のような批判を恐れない勇猛果敢なマスメディアは昨今の情報が入り乱れる社会では重要なエビデンスになりえると十分に感じました。

・文藝春秋は想像以上にラフな職場。いろんな意見をいろんな立場の人がいつでも出せるような場所。親しき中にもスキャンダル、向かうところ敵だらけ。同じ会社なのに週刊文春か文藝春秋かで取材を受ける側の態度が真反対になる。変わることは嫌われることだが、大学に行けば変わらないことはもっと嫌いになる。同調圧力から抜け出すにはいろんなところに行き体験するしかない。今回の講演で文藝春秋はあまり身近に感じていなかったものだったが、知っていくうちにずっとそばにある気がする様になった。また文藝春秋という会社についても知ることができ、いろんな縁があり、それらがまたいろんなところで巡り合っていくことが多いと思った。週刊文春は決して怖いものではないと改めて思うことができた。

・文藝春秋で出来た仲が週刊文春で壊れてしまうこともあると知ってびっくりしたし、ましてやそれが自分の仲のいい人だとしたら少しはためらう気持ちもあるだろうなと思った。また、芸能人を推している身としては週刊文春なんて無くなればいいのにと思ってしまうことも良くあるけど、書いてあること全て事実なのには変わりないし、私たちのような一般の人が知らない情報をいち早く知れたりするのは楽しそうだなとも思った。

・週刊文春は怖いものだと思っていたけど、中を覗いてみたらすごく面白くて次に店頭で見つけたら手に取ってみようと思いました。元々本を読むのが好きだったので、沢木耕太郎さんの著書も読みたいなと思いました。有隣堂さんとの YouTube 動画も面白くて最後まで見たいと思いました。日本のさまざまな関係性や、動き、情報が知れてとても面白い会社だなとおもいました。とても魅力を感じて、この会社で働いたら毎日つまらないということもなく、楽しい日々が待っているのだろうな、と思い、文藝春秋で働いてみたいなとさえ思ってしまいました。またいつかお話を伺う機会が、どこかでご縁があることを願っています。本日はご講演ありがとうございました。

・雑誌などは今まで読んだことがなく今日初めて知ることも多くあった。縁というと、自分はスポーツをしているので地域の活動によく参加しているのだが、スポーツをしていなければ関わることがなかっただろう人とも仲良くさせてもらったり、色々な話をするようになったりと、今回の話はすごく深いと思った。これからもそのような縁があると思うので一人ひとりの出会いを大切にしていきたい。